報告区分　1

公民館活動への参加資格に着目した地域コミュニティとＩターン者の関係に関する一考察
－沖縄県石垣島の６集落の比較を通して－

Consideration for the Relations with Local Community and I-turn that Focused on Qualification for Community Centre
- Through the Comparison of Situations at Six Villages of Ishigaki island, Okinawa -

○上村真仁[*1]，山崎寿一[*2]
KAMIMURA Masahito, YAMAZAKI Juichi

The aim of this paper is to clarify the mechanism which local community subsumes immigrants into through the comparison of situations of six villages of Ishigaki island. The result in this study clears following three points as knowledge to harmonize with conventional inhabitants and immigrants.
1) The mechanism for subsuming immigrants varies according to degrees of population scale and ritual's strictness of the village.
2) The immigrants adapt themselves to the community according to the cycle of "the contribution", "the trust", "the expectation", "the responsibility", "the further contribution".
3) The community centre subsumes immigrant by using three stages of the "local main constituent" "cooperation " "participation "

キーワード：公民館、伝統的集落、開拓集落、Ｉターン、関係構築
Keywords: Community Centre, Traditional Community, Frontier Settlement, I-turn, Relationship-building

１．研究の背景と目的
1.1 研究の背景・経緯

沖縄県石垣島は、離島地域にあって人口が堅調に増加している数少ない地域である。しかし、2025 年をピークに人口は減少に転じると予想されており [1)]、既に人口が大きく減少している集落もある。石垣市では「石垣市移住・定住支援計画【平成 29 年～33 年度】」を策定し、移住人口の確保に向けた施策を展開している。

一方、石垣島は多くの集落が、地縁・血縁の絆が強く、琉球王府時代からの祭祀や神事を受け継いでいる。県外からのＩターン者や観光客の増加は、時として、地域との軋轢を生み、その対応が課題となっている [2)]。

小田切らによると移住の課題は「コミュニティ」、「住宅」、「仕事」の３つとされ [3)]、住宅や就業機会の斡旋に加え、移住者と地域の「マッチング」を行う「移住体験」が試行されている。こうした移住支援策は行政や非営利組織、営利組織など多様な主体が関与し実施されているが、移住者を受ける地域側の取り組みについて、具体的なプログラムがあるわけではない。

石垣市が各公民館と共催で 2016 年 11 月から 12 月にかけて実施した「移住・定住支援に関する意見交換会」によると全ての集落が移住者に対して公民館活動をはじめとする地域への協力を求めている [4)]。また、筆者らの石垣島白保集落での在来住民と県外出身のＩターン者（以下Ｉターン者）などの協働による地域づくりに関する研究 [5)] では、在来住民からなるコミュニティ（以下、地域コミュニティ）とＩターン者との関係構築において、公民館が重要な役割を果たしていることが示唆された。

沖縄県で集落毎に設置されている公民館は、本土の公民館とは異なり自治組織としての機能を有している。石垣島では 41 の集落に公民館が設置され、集落運営を担っている。地域コミュニティとＩターン者との関係構築における公民館の役割の解明は、在来住民の側からみて望ましい移住・定住施策を考える上で有効な知見となる。

1.2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究は、移住・定住の課題の１つである「コミュニ

*1　筑紫女学園大学　教授・工修　Chikushi Womens Univ., Professor, M. Eng.
*2　神戸大学大学院　教授・工博　Graduate school of Kobe Univ., Professor, Dr. Eng.

ティ」に着目し、石垣島の農村集落の中から成立経緯や人口動態の異なる6つの集落を対象として、地域コミュニティとＩターン者の関係構築における公民館の役割を明らかにすることを目的とする。具体的に、以下の3つの研究課題を設定する。

③集落運営の仕組みからみた石垣島集落の特徴

④地域コミュニティがＩターン者を受入れるプロセス

⑤ＩターンＩ者と地域コミュニティを繋ぐ公民館の役割

(2) 研究の方法

2017年6月石垣市役所移住・定住係、2018年白保公民館関係者、白保御嶽関係者、川平公民館長、川平青年会、伊野田公民館役員の現地聞き取り調査、2019年6月石垣市教育委員会いきいき学び課石垣市自治公民館連絡協議会担当者、川平公民館長、伊野田公民館役員、下地公民館長、宮良公民館元役員、久宇良公民館長の聞き取り調査(表1)とともに、既存研究、既存文献[6)~13)]の収集・分析により集落の特性を明らかにした。

なお、本研究では、集落の居住者を「先住者：琉球王府時代からの通世代にわたる居住者」、「在来住民：1972年本土復帰以前に移住・定住（・開拓）し現在の集落形成を進めた居住者(先住者を含む)」、「移住者:他の集落、島々から仕事などの都合で移り住んだ者」、「Ｉターン者:復帰以降沖縄県外から移り住んだ者（特に、2000年以降に急増している)」の4つの分類とし、Ｕターン者はそれぞれの家系が所属する分類に属すものとした（表2)。

２．研究の位置付け

沖縄の公民館に関する研究は、社会教育の分野に蓄積がある。戦後、米軍統治下にあった沖縄の「公民館」は、本土とは異なるは展開を遂げ、「単に行政社会教育の枠組に限定してみるのでなく、～中略～　集落の自治や祭祀や文化芸能の諸活動あるいは民衆諸運動の展開にも視野を広げて捉えていく必要がある」[14)]とされている。現在も沖縄では、公民館は地域性に応じ独自の機能を発揮している。沖縄県公民館研究大会では、地域づくりの拠点としての公民館のあり方が活発に議論されている[15)]。

また、石垣島での移住・定住者と地域コミュニティの関係に関する研究は、2000年以降の沖縄ブームや移住ブームを機に、地理学、人類学において進められ、川平や吉原、米原、伊原間集落での研究が報告されている[16)17)18)]。

本研究は、石垣島の複数の集落を取り上げ、公民館の運営の仕組みと移住・定住者との関わりを比較分析することで、地域コミュニティのＩターン者の受入れに対する多様性とその中に共通する考え方を明らかにする点に特徴がある。

表１　集落関係者等ヒアリング調査対象者

対象集落	実施月	対象者	聞き取り内容
石垣市	2017.6 2019.6	石垣市移住定住係 自治公民館連絡協議会担当Ｙ氏（先住者）	石垣島での公民館や連絡協議会の役割、所属公民館の状況
川平集落	2018.11 2019.6	川平公民館長Ｔ氏（先住者)、川平青年会Ｈ氏（Ｉターン二世）	公民館運営と移住者・Ｉターン者の参加について
宮良集落	2019.6	元公民館文化部長Ｎ氏（先住者）	
白保集落	2017.6 2018.8 2018.11	運営審議委員 Mm 氏、2018 年度御嶽会長 Yh 氏、Ik 氏、Ms 氏、公民館長･御嶽会長 Mk 氏(全て先住者)	公民館運営と御嶽／御嶽と移住者・Ｉターン者／公民館運営と移住者・Ｉターン者の参加について
伊野田集落	2018.11 2019.6	元公民館文化部長 Myg 氏（Ｉターン者・嫁）	公民館運営と移住者・Ｉターン者の参加について
久宇良集落	2018.11 2019.6	2018 年度公民館長Ｙ氏（Ｉターン者）	
下地集落	2018.11 2019.6	公民館長０氏（Ｉターン者）	

表２　来住時期別の集落居住者の分類

集落名	琉球王府時代	明治・大正	1972年以前	1972年以降
川平	先住者（在来住民）	移住者**	移住者**	Ｉターン者* 移住者**
宮良				
白保		在来住民	在来住民	
伊野田	－	－		
久宇良				
下地				

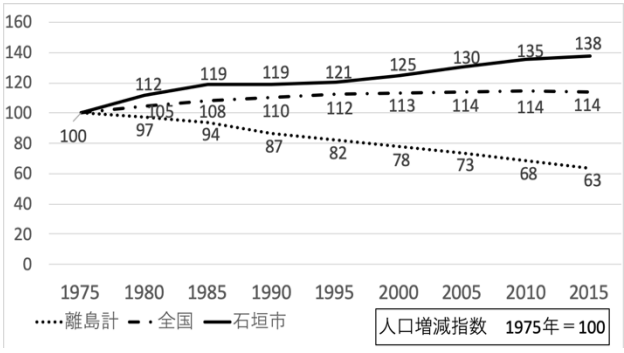
注）＊沖縄県外からの移住者、＊＊他集落からの移住者
なお、Ｕターン者は出身の分類に所属するとした。

３．調査対象の概要

3.1 石垣島の特徴

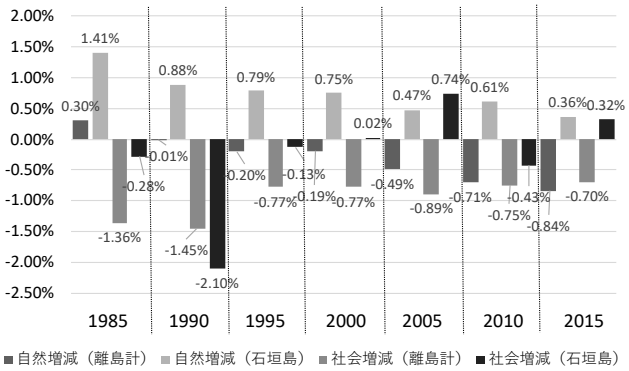
1972年の復帰以降に実施された国勢調査1975年（昭和50年）の人口を100とし、離島計、全国、石垣市で増減を比較すると石垣市は一貫して人口が増加していることがわかる（図1)。2015年（平成27年）の国勢調査では全国離島の中で3番目の人口を有している。

人口動態の推移を離島全体の合計と石垣島で比較すると離島全体では、自然減、社会減が続いている。しかし、石垣島の自然変動は一貫して増加しており、一方、社会増減は、社会状況の影響を受けて増加、減少を繰り返し



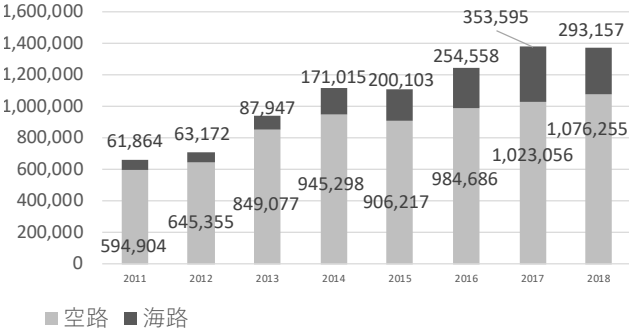
資料）国勢調査データより筆者作成

図１　本土復帰以降の石垣市、離島、全国人口増減指数



資料）離島統計年報 2017 より筆者作成

図 2　人口動態推移の比較（離島計・石垣島）



資料）石垣市企画部観光交流推進課石垣市観光入域推計表より

図 3　石垣市観光入域客数の推移

表 3　石垣島の集落の比較表

市街化状況	成り立ち	地域区分	字	小字	人口増減 1998	2018	増減	開拓移民などの従前の居住地
農村	伝統的	西部	川平	**川平**	**491**	**674**	**183**	
		中部	名蔵	名蔵	319	312	▲ 7	戦前本土、台湾、戦後宮古など
		北部	伊原間	伊原間	149	195	46	戦後宮古から自由移民を受け入れ再生
		東部	**宮良**		**1,499**	**1,829**	**330**	
			白保	**白保**	**1,537**	**1,582**	**45**	**旧集落と戦後、宮古、多良間自由移民**
	開拓	西部	崎枝		117	135	18	戦後多良間、宮古など
			川平	大嵩	21	16	▲ 5	戦後多良間、宮古など
				仲筋	16	14	▲ 2	戦後宮古など
				吉原	146	274	128	戦後宮古など
			桴海	米原	98	145	47	戦後読谷、与那城、名護など
				富野	8	20	12	戦後桴海、宮古など
				大田	26	28	2	戦後宮古、本土など
				伊土名	44	67	23	戦後宮古、久米島、糸満など
			野底	栄	61	93	32	戦後本島越来、美野など
				下地	**74**	**127**	**53**	**戦後宮古など**
				兼城	41	64	23	戦後本島、兼城など
				多良間	47	43	▲ 4	戦後多良間など
		中部	登野城	嵩田	140	139	▲ 1	戦前台湾、本土など
			名蔵	元名蔵	48	85	37	戦後宮古など
			平得	開南	33	86	53	昭和戦前
			真栄里	於茂登	79	60	▲ 19	戦後北谷、玉城、与那国など
			大浜	川原	173	252	79	昭和戦前
				三和	108	37	▲ 71	戦後宮古、台湾、本土など
		北部	平久保	**久宇良**	**42**	**24**	**▲ 18**	**戦後大宜味、玉城など**
				吉野	4	1	▲ 3	戦後東風平、那覇など
				平久保	90	78	▲ 12	戦後宮古、本島国頭など
				平野	65	41	▲ 24	戦後、本島、宮古、多良間など
			伊原間	明石	163	131	▲ 32	戦後大宜味、読谷、玉城、石川など
		東部	桃里	星野	208	159	▲ 49	戦後大宜味自由移民など
				伊野田	**184**	**145**	**▲ 39**	**戦後大宜味など**
				大野	13	11	▲ 2	伊野田から分離
			白保	大里	124	105	▲ 19	戦後大宜味、宮古など
市街地	埋立地	南部	新栄町		2,550	2,525	▲ 25	
			浜崎町		932	1,135	203	
			八島町		152	328	176	
			美崎町		558	477	▲ 81	
	伝統的		登野城	登野城	9,411	9,181	▲ 230	明治期糸満漁民が海岸部に集落形成
			石垣		3,756	3,866	110	明治期糸満漁民が海岸部に集落形成
			新川		8,640	8,567	▲ 73	明治期糸満漁民が海岸部に集落形成
			真栄里	真栄里	2,916	5,294	2,378	
			大浜	大浜	2,542	3,467	925	
			大川		3,686	3,413	▲ 273	
			平得	平得	2,081	2,696	615	
	開拓		大浜	磯辺	661	596	▲ 65	戦後沖縄本島、宮古など

資料）住民基本台帳、参考資料 11)より筆者作成

ている。2000 年代以降は世界的な不況により 2010 年に社会減がみられるが、2005 年（2000 年からの沖縄ブーム時）と 2015 年（2013 年新石垣空港供用開始以降）には社会増となっている（図 2）。空路海路共に石垣島の入域観光客数は一貫して増加傾向にある（図 3）。

3.2 対象集落の選定

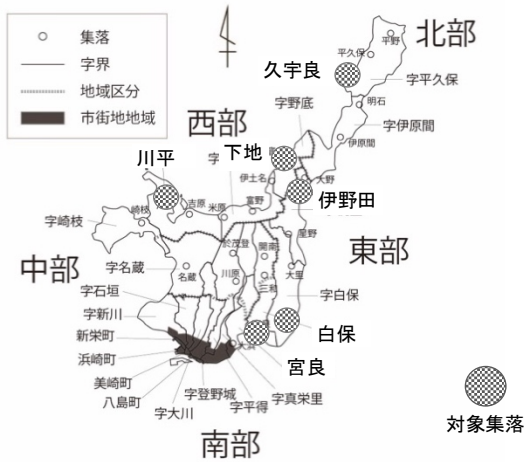
石垣島の集落は、琉球王府時代から続く伝統的集落と戦後の開拓集落、埋め立てによる住宅地の大きく 3 つに区分できる(表 3)。南部地区の集落は、市役所や県の出先機関、石垣港や石垣空港が立地する都市的機能の集積した市街地を形成している。このため商業施設、住宅が連担する都市的地域となっており対象から除外した。

本研究では、在来住民とＩターン者との関係に着目するため、市街地から離れ、隣接集落と空間的な独立性が高い農村集落で成立経緯や人口規模、人口増減の状況が異なる、川平、宮良、白保、伊野田（字桃里）、久宇良（字平久保）、下地（字野底）の 6 集落を対象とした（図 4）。

3.3 対象集落の概要

(1) 人口動向からみた特徴

対象 6 集落はいずれも市街地から離れており、一部にホテルの立地などがみられるが農村集落といえる。



注）地域区分は、「石垣市人口ビジョン」平成 28 年 3 月石垣市に準じた区分とした

図 4　石垣島の集落の立地と対象集落の位置

表 4　対象 6 集落の人口増減指数

字	小字	1993	1998	2003	2008	2013	2018
川平		100	96	125	133	123	131
宮良		100	115	120	136	137	140
白保		100	95	97	100	97	98
桃里	伊野田	100	91	72	90	84	71
平久保	久宇良	100	95	73	86	68	55
野底	下地	100	274	404	581	519	470

資料）石垣市住民基本台帳データより筆者作成

沖縄ブーム以前の 1993 年を基準に人口動態をみると伝統的集落では川平、宮良は人口がそれぞれ 30%、40%と大幅に増加しているが、白保はほぼ横ばいで推移している（表 4)。開拓集落では北部地区の久宇良は人口が−45%と半減、東部地区の伊野田は緩やかに減少している。一方で、西部地区の下地は急激に人口が増加している。

(2) 伝統的集落の空間分布

川平、宮良、白保は、琉球王府時代に石垣島に 21 あった集落のうちで現在に続く 12 集落に含まれる。地縁・血縁による共同体である御嶽[注1)]の氏子集団を継承し、農耕儀礼としての祭祀や神事を現在も受け継いでいる（表 5)。

琉球王府時代には、南部地区に八重山を統治した役所が置かれ、西側は川平が、東海岸は白保がもっとも離れた集落であった[注2)]。

川平では、先住者とＩターン者の住宅は混在している。宮良は、山側にある先住者の居住区域とは離れた場所に県営住宅やみどり団地と呼ばれる宅地分譲地が整備されるなど移住者やＩターン者が先住者と住み分けている。白保はＩターン者の住宅は在来住民と混在している。

(3) 開拓集落の空間分布

伊野田、久宇良、下地は、いずれも 1950 年代に沖縄本島や宮古諸島などからの開拓移民が拓いた開拓集落である（表 6)。これらの集落では、来歴にかかわらず開拓時代に苦労を共にした開拓移民(在来住民)の絆は強い[6)]。

表 5　対象集落（伝統的 3 集落　川平、宮良、白保）の概要

	川平集落	宮良集落	白保集落
集落の成り立ち	✓ 琉球王府時代 ✓ 石垣島でもっとも古い集落の１つ	✓ 琉球王府時代 ✓ 1771 年の津波で 171 人生存 ✓ 小浜島から 320 人を寄百姓して、再建	✓ 琉球王府時代 1713 年波照間島から寄百姓 300 人余りを入れ独立村に ✓ 1771 年の津波で 28 人生存 ✓ 波照間島から 418 人を寄百姓して、再建
先住者	✓ 川平村を構成した 9 つの小村の住民	✓ 津波の生存者と小浜島からの寄百姓	✓ 津波生存者、波照間島からの寄百姓
在来住民の構成	✓ 先住者	✓ 先住者	✓ 先住者＋廃藩置県後の首里士族、戦後の宮古諸島からの自由移民[注3)]
規模（2018.3）	人口 674 人、世帯数 408 世帯	人口 1,829 人、世帯数 825 世帯	人口 1,582 人、世帯数 750 世帯
移住者の割合	✓ 集落 408 世帯中、300 世帯が集落外からの移住者（内Ｉターン者は３割程度）	✓ 集落 825 世帯の内 7 割が移住者。Ｉターン者は 1 割程度	✓ 集落 750 世帯中、Ｉターン者は約 100 世帯 1 割強（13.3%）
集落の運営	✓ 在来住民が川平公民館を組織	✓ 在来住民が中心となり宮良公民館を組織	✓ 在来住民が中心となり本土からの移住者を取り込みながら白保公民館を組織
集落の特性	✓ 市街地より車で 40 分 ✓ 川平小中学校が立地 ✓ 川平湾が国の名勝指定 ✓ 県の水産研究所が立地 ✓ 復帰後、農地買い戻し運動で農業を再興	✓ 市街地より車で 15 分 ✓ 宮良小学校が立地 ✓ 1992 年新空港の建設地となるが優良農地を守るために反対	✓ 市街地より車で 20 分 ✓ 白保小学校、白保中学校が立地 ✓ サンゴ礁の埋め立てによる新石垣空港の建設に反対を唱え、埋め立てを回避 ✓ 新石垣空港が集落内に 2013 年供用開始
集落の産業特性	✓ 伝統的な農村 ✓ 1972 年日本復帰以降急速に観光地化 ✓ リゾートホテル 3 軒、ダイビングショップ、土産物屋など観光産業が立地	✓ 伝統的な農村 ✓ 現在は、酒造会社が立地 ✓ リゾートホテルが 2 軒立地	✓ 伝統的な農村で畜産が盛ん ✓ ユーグレナなどの培養施設が立地 ✓ 空港供用開始後、民宿、ゲストハウスなどが 20 軒立地
祭祀と共同体	✓ 御嶽を中心に 26 の祭祀行事を継承している。4 つの御嶽にはそれぞれ氏子（イビニンジュ）がおり、先住者が代々継承	✓ 津波後の住民が御嶽の氏子として御嶽の神事を継承 ✓ 来訪神であるニーロー神の儀礼も継承 ✓ 祭祀集団である先住者以外には、儀礼にかかわる一切のことを漏らさない	✓ 津波後の住民が御嶽の氏子（ヤマニンジュ）として御嶽の祭祀行事を継承 ✓ その後の移住者は、豊年祭や海神祭を創設し、先住者と融和 ✓ ゆらてぃく祭り創設、Ｉターン者と協働

資料）各集落に関する資料 13)14)15)、石垣島資料 12)16)、2018 現地調査などより筆者作成

表 6　対象集落（開拓 3 集落　伊野田、久宇良、下地）の概要

	伊野田自治公民館	久宇良公民館	下地公民館
集落の成り立ち	✓ 戦後開拓集落、1951 年入植	✓ 戦後開拓集落、1956 年入植	✓ 戦後開拓集落、1954 年入植
先住者	−	✓ −	−
在来住民の構成	✓ 大宜味村や竹富島、宮古からの戦後の開拓移民	✓ 勝連、玉城、名護の出身の開拓移民	✓ 宮古の下地町からの開拓移民
規模（2018.3）	人口 145 人、世帯数 83 世帯	✓ 人口 24 人、世帯数 14 世帯	人口 127 人、世帯数 60 世帯
移住者の割合	✓ 集落 83 世帯中、Ｉターン者は４世帯（4.8%）	✓ 集落 14 世帯中、8 世帯がＩターン者（内 3 世帯 2018.3.以降 64.７%）	✓ 集落 60 世帯中、5 世帯が開拓移民、Ｉターン者 55 世帯（91.7%）
集落の運営	✓ 人口減少・高齢化する在来住民と数少ないＩターン者が協力・連携し運営	✓ 数少ない在来住民の思いを受け継ぐ、Ｉターン者が集落運営を継承	✓ 数少ない在来住民の思いを受け継ぐ、Ｉターン者が集落運営を継承
集落の特性	✓ 市街地から車で 40 分 ✓ 伊野田小学校が立地 ✓ 伊野田漁港、伊野田キャンプ場が立地	✓ 市街地から車で 50 分	✓ 市街地から車で 30 分 ✓ 野底小学校が立地 ✓ アパート、宅地造成でＩターン者が急増
集落の産業特性	✓ 農業の集落、宿泊業、食堂など観光業が少しずつ立地	✓ 牧場、星空観光やサバニツアーなどの観光事業がスタート	✓ エコツアーやマリン関連事業者の立地が進む
祭祀と共同体	✓ 御嶽が無く、祭祀に基づく共同体はない	✓ 御嶽が無く、祭祀に基づく共同体はない	✓ 御嶽が無く、祭祀に基づく共同体はない

資料）各集落に関する資料 11)、石垣島資料 12)、2018 現地調査などより筆者作成

開拓集落は、伝統的集落の川平、白保より以北、島の中央の於茂登岳の麓、崎枝半島や名蔵に分布している。今回の対象は北部、東部、西部に位置している。

伊野田は、南北に細長い集落区域に在来住民と数少ないＩターン者の住宅が点在している。久宇良は、Ｉターン者が開拓移民の空き家を借りるなど、住宅が混在している。また、下地では初期のＩターン者は、開拓移民の住む居住区域内の住宅に転入したが、その後、新しい住宅地が造成され、旧集落区域外にＩターン者の住宅の集積がみられ空間的な分離が進んでいる。

3.4 石垣島における公民館の役割

(1) 公民館の位置付け

石垣島の各集落において自治組織としての役割を果たしているのが公民館である。

一般的に公民館とは、市町村によって設置される社会教育文化施設を指すが、石垣島では集落住民によって設置された字（集落）の自治組織とその拠点となる施設を指す。41 公民館の内、21 組織が地縁団体の認可を受けている。その多くが公民館を名乗っているが、新川や石垣では字会としている。伝統的集落では、神事や祭事の継承と産業振興のために、開拓集落では、住民間の相互扶助組織として立ち上げられ、社会教育法に基づく公民館とはとは異なる機能や位置付けを有している(表 7､表 8)。

(2) 伝統的 3 集落の公民館の特徴

伝統的集落である川平や宮良、白保は、琉球王府時代の村落共同体にその起源を遡ることができる。

石垣市史には､「前盛義英氏によれば､宮良村では王府時代､行政組織として 6 つのフン（一つのフンは 10 戸程度）があり､6 人のフンガサ（組頭）によって村落が取り仕切られていた。その特徴としては、共同の連帯責任があることで、基金もあり、フンヌスルイ（組の揃い）と称する集会があった。」と記されており、1940 年までフンの旧制は継承されていた [7)]。これら小規模の村落共同体を束ねる形で設置されたものが部落会や字会などの公民館の前身組織である。

川平では琉球王府時代に村を構成していた 4 つの集団（4 つの御嶽の氏子）が、神事、祭事の継承と連携による地域振興､産業振興をはかるために組織化したもので、部落会は 1928 年に始まり、1962 年に名称を公民館に変

表 7　対象集落（伝統的 3 集落　川平、宮良、白保）の公民館と移住者・Ｉターン者との関係

	川平公民館	宮良公民館	白保公民館
法人格	任意団体	認可地縁団体	認可地縁団体
設　立	✓ 1928 年に部落会発足 ✓ 1962 年公民館に名称変更	✓ 戦前から ✓ 2002 年地縁団体の認可取得	✓ 1916 年に白保字会発足 ✓ 1953 年公民館に名称変更 ✓ 1999 年地縁団体の認可取得
設立目的	✓ 地域内の連帯と相互扶助（仲間づくり）による地域振興、産業振興のための自発的組織として設立	✓ 住民相互の連帯と協調を図り、村の伝統を継承し、活力ある村づくりをするために設立	✓ 住民の親和団結を密にし、教養の向上、産業の振興、生活の合理化を促進する村づくり組織として設立
会員資格	✓ **川平集落にある 4 つの御嶽の氏子であること**（移住後約 30 年経ち協力的なＩターン者を氏子として認める予定）	✓ **先住者が正会員（居住していなくても良い）** ✓ 先住者でない居住者は準会員	✓ **白保集落内の居住者** ✓ **出身地には関わらない**
会員数	✓ 100 世帯	✓ 300 世帯（先住者、他地区（内Ｉターン者 1 割程度）は半々）	✓ 467 世帯（内 97 世帯がＩターン者）
事業の特徴	✓ 年間 26 回ある**神事、祭事の継承を核とし、神事部を有する** ✓ 石垣市と行政連絡員制度の契約を締結、公民館が川平集落全住民への広報実施	✓ **祭事・行事、儀式を公民館が主催** ✓ ただし、認可取得時にニーロー神の儀礼については公民館から分離した	✓ **年間 7 つの神事、祭事を行う** ✓ 豊年祭の奉納行列を 5 つの班に別れ実施 ✓ 文化継承と地域の活性化のために 2004 年より隔年で白保ゆらてぃく祭りを開催
御嶽や祭祀との関わり	✓ 執行部でもある神事部は御嶽の氏子から選任されるなど、**公民館と御嶽が一体**となっている	✓ 祭祀集団である**先住者とそれ以外の居住者は厳格に区分**されている	✓ 4 つの**御嶽と公民館の運営は別であるが、**公民館が御嶽の祭祀をサポート ✓ 豊年祭では公民館幹事（班長）が中心となり**Ｉターン者も参加し奉納行列を実施**
移住者・Ｉターン者の公民館活動への参加範囲	✓ 地縁団体への移行により、**移住者・Ｉターン者の参加できる仕組みを検討したが住民の結束を維持するため従来通りの任意団体とすることを 2019 年 6 月決定** ✓ 結願祭の余興の踊りは移住者・Ｉターン者も 9 つの教育隣組（班）で参加が可能	✓ 神事を除く公民館活動には参加可能 ✓ 過去に集落に認められた他集落からの移住者が役員に就任したことがある（Ｉターン者はない） ✓ **公民館長は宮良出身者（先住者）しかなれない**（先住者以外は考えられない）	✓ 地域への積極的な参加が認められると**移住者・Ｉターン者も公民館幹事（班長）などを任せられる** ✓ 公民館役員は 49 歳の生まれ年の同級生が就任することとなっており、**移住者・Ｉターン者も役員として運営に参加する**
Ｉターン者に対する考え方	✓ 歴史伝統文化に根ざした活動が地域の活力の源であり、切っても切れないものである。こうした農耕儀礼、祭祀を継承する**川平の特徴や誇りへの理解と協力を求めていくこととしている**	✓ Ｉターン者に地域への理解と協力を促すため、公民館入会の案内を配布 ✓ ただし、豊年祭を主軸に地域運営を行なっているので**Ｉターン者に入って欲しいというのとは違う**	✓ 宮古諸島からの自由移民などを受入れた経験から外来者を受入れる素地があった ✓ 協力的なＩターン者は積極的に登用し、**白保集落への帰属意識を高めることで在来住民との融和を図る**
Ｉターン者との関係構築の仕掛け	✓ PTA を通してＩターン者へ祭事への理解と参加を促している ✓ 公民館の傘下団体である婦人会、老人会、青年会には入会が可能	✓ 公民館の傘下団体である婦人会、老人会、青年会、100 歳体操などの中で、Ｉターン者との関係を作っている	✓ 豊年祭の班別の活動 ✓ 小学校、中学校の PTA 活動 ✓ 合同生年祝賀会など同年生同士の結束を深める仕組み

資料）2018 年、2019 年聞き取り調査、参考文献 16)より筆者作成

更した[8]。神事を中心に据えたことから、氏子以外の公民館への参加が認められておらず、移住者・Ｉターン者は公民館員となっていない。先行研究では、その理由として①川平集落の宗教的理由と②本土復帰時に処分した共有地の売却金の在来住民108世帯への預託とその償還の仕組みがあることを挙げている[17]。聞き取りから、公民館員の高齢化などを理由に預託金の償還制度が廃止され、2020年度から公民館費を現行の32,000円／世帯・年から12,000円／世帯・年に減額することが明らかになった。しかし、川平公民館は、先住者の結束を維持するため、移住者・Ｉターン者の公民館への参加の制限を継続することとした。

宮良では、川平と同様に神事を集落運営の中心に据えており、移住者・Ｉターン者の公民館への所属を認めていなかった。Ｉターン者の増加から、秘祭と言われるニーロー神の儀礼[注3]の運営組織を公民館活動から切り離し、移住者・Ｉターン者に公民館の門戸を開いた。移住者・Ｉターン者は準会員（会費が異なり議決権は有る）にしかなれず、明確に区分されている。

白保では、大正期に字会が設置され、昭和に入り白保区となり、1953年琉球政府通達を受けて白保公民館と名称を変更した[9]。字会の会長は、白保小学校長の兼務であった。1940年に初めて住民から代表（区長[注4]）が選ばれたが、これは先住者ではなく、明治時代に首里から白保に移り住んだ士族であった。白保では公民館活動に早くから移住者が参加し共同体を形成してきた。1962年には宮古諸島からの自由移民が公民館長となった。白保は、川平や宮良とは異なり来住者を共同体に取り込み集落を運営してきたことが特徴といえる。白保は移住者・Ｉターン者に寛容であり、地域への貢献を評価し公民館などの役職へ登用するケースが顕著にみられる。

(3) 開拓3集落の公民館の特徴

開拓集落の公民館は、開拓団にその起源をみることができる[6]。いずれも石垣市の中心部から遠隔地にあり、年々人口が減少していた。市街化が進んでおらず、豊かな自然が残されており、2000年以降観光事業に従事するＩターン者が増えている。開拓3集落では、移住者(島内他集落や他の島々から)はほとんどみられない。

伊野田は、他の2つの開拓集落に比べてＩターン者が少なく、在来住民の構成割合が高い。公民館が簡易水道

表8　対象集落（開拓3集落　伊野田、久宇良、下地）の公民館と移住者・Ｉターン者との関係

	伊野田自治公民館	久宇良公民館	下地公民館
法人格	認可地縁団体	認可地縁団体	任意団体
設　立	✓ 1950年自由移民による伊野田部落会設立 ✓ 1951年の計画移民の移民団などが合流 ✓ 2001年地縁団体認可取得	✓ 1956年移民団を母体とする。 ✓ 1997年地縁団体認可取得。	✓ 1954年開拓時の下地団を母体に設立
設立目的	✓ 開拓移民の結束と相互扶助を図るための地縁組織として設立	✓ 開拓移民の結束と相互扶助を図るための地縁組織として設立	✓ 開拓移民の結束と相互扶助を図るための地縁組織として設立
会員資格	✓ 集落内の居住者 ✓ **出身地には関わらない**	✓ 集落内に居住し、半年以上経ったもの ✓ **出身地には関わらない**	✓ 集落内の居住者 ✓ **出身地には関わらない**
会員数	✓ 70世帯（内3世帯が県外Ｉターン者） ✓ 県外Ｉターン者で未加入者あり	✓ 13世帯正会員（内5世帯が開拓者世帯）、3世帯準会員（県外Ｉターン者全世帯が関与）	✓ 35世帯（内5世帯が開拓者世帯） ✓ 組織率が低い（県外Ｉターン者25世帯が未加入）
事業の特徴	✓ **年間行事は3つ：**入植記念日、敬老会、アブシバレー（悪虫払い）（入植記念日と敬老会を一緒に開催し、アブシバレーが防災訓練などに置き換わっている） ✓ 簡易水道を公民館が運営 ✓ **集落の共同作業への参加を義務付けた「扶役制度」を有している**	✓ **年間行事は3つ**：入植記念日、母の日（60年以上の歴史）、敬老会の ✓ 簡易水道を公民館が運営 ✓ 集落内で実施する観光業などに対する**公民館認定制度がある（公認事業者から公認料を徴収）** ✓ 毎月、全世帯が集まり話し合いを実施	✓ **年間行事は3つ**：新年会、入植記念日、総会 ✓ かつて敬老会を行なっていたが、現在お祝いだけを家に届けている
御嶽や祭祀との関わり	✓ 御嶽はない ✓ 豊年祭はない	✓ 御嶽はない ✓ 正月には水の神様への願いを行う ✓ 豊年祭はない	✓ 御嶽はない ✓ 開拓時厳しい環境であったため、神事や豊年祭などは行わなかった
移住者・Ｉターン者の公民館活動への参加範囲	✓ 人口が少ないので移住者・県外Ｉターン者も公民館員となってもらう ✓ **役員になることも可能**	✓ 移住者・県外Ｉターン者に地域行事への参加を求めている ✓ **熱心に参加し、地域へ貢献する人は積極的に公民館の役員に登用、県外Ｉターン者の公民館長も**（若い県外Ｉターン者はほぼ毎年役員に就任）	✓ 地域のことに汗を流すことで、**認められると役員、館長に登用される** ✓ 県外からのＩターン者初の公民館長は、もっとも早く移住をした現館長で、在来住民と県外Ｉターン者のつなぎ役を期待されている
Ｉターン者に対する考え方	✓ 住宅が無く、県外Ｉターン者を受入れることが出来ない ✓ 小さな宿など観光関連の施設ができているが、従業員は他集落から通勤している	✓ 賃貸住宅の契約条件に地域参加が定められている ✓ 公民館を中心に**入植の歴史**を受け継いで欲しい	✓ 開拓移民の多くが集落を去ったため近年の県外Ｉターン者の中には、開拓集落であることを知らない人もいる。 ✓ **開拓の歴史を理解**して欲しい。
Ｉターン者との関係構築の仕掛け	✓ 人口減少により婦人会、老人会、青年会なども無くなっており、**公民館だけが集落住民間の交流の場**となっている ✓ 交流人口の拡大を目指して、直売市などを企画・実施している	✓ **公民館を中心に**、地域の環境を大切にすることで、自然豊かな静かな暮らしを求める県外Ｉターン者を呼び込む ✓ そうした人の事業を公民館が認定することでサポートする	✓ つんだら祭りを始めるなど、**野底地区5集落（伊土名、多良間、下地、兼城、栄）が連携**し在来住民と県外Ｉターン者とが交流する仕組みを構築

資料）2018年、2019年聞き取り調査より筆者作成

を運営しており、水を利用するためには公民館への参加が必須となっている。開拓以来の集落内の結束を高める仕組み（扶役制度[注5)]）が継承されており、全ての集落居住者に共同作業への参加が義務付けられているためＩターン者が在来住民と関係を構築し易い環境となっている。

久宇良は、17 世帯のうち 11 世帯がＩターン者であり、集落の運営は、Ｉターン者の参加無くしては難しい状況にある。在来住民が集落内に所有し賃貸に出す住宅では、賃貸条件の中に地域行事への参加が盛り込まれ、集落の運営に協力的なＩターン者の移住・定住が求められている。市街地への通勤も距離的に難しく、Ｉターン者は、久宇良の環境（自然や静けさ、人の少なさなど）を評価し、ここでの生活に価値を見出した定年後の高齢者や観光業などの自営業者に限られている。現在のＩターン者は、開拓移民への敬意と共感を持ち、全員参加で集落運営に取り組んでいる。

下地は在来住民が減少する一方で、在来住民の住宅地の周辺部で集合住宅の建設や宅地造成が進み、Ｉターン者が増加している。集落 60 世帯のうち公民館員は、35 世帯（内 5 世帯が在来住民）と、組織率が低い。現在、在来住民からの指名でもっとも早い時期に転入したＩターン者が公民館長を務めており、新規Ｉターン者と在来住民との橋渡し役となることが期待されている。

４．集落運営の仕組みからみた集落の特徴

4.1 石垣島集落の集落運営とＩターン者の関係

在来住民とＩターン者との空間的、社会的関係から集落を 4 つに分類することができる。空間的関係とは、在来住民の住宅とＩターン者の住宅との位置関係であり、立地場所が分離しているか、混在しているかで区分する。また、社会的関係とは、公民館など地域の自治活動への参加の程度とし、両者が密に連携しているものと、関係が希薄なものに区分する（表 9）。

在来住民、公民館、Ｉターン者の関係を図示し、その特徴を整理した（表 10）。

①Ａタイプ集落

川平の先住者、下地の在来住民と公民館、移住者・Ｉターン者の関係を「Ａタイプ集落」と呼ぶ。先住者、在来住民が居住する集落空間の空き家、空き地を活用し移住者・Ｉターン者が混住している。旧居住区域の周辺部にも宅地造成がひろがり、Ｉターン者の人口が拡大しているが、先住者、在来住民との社会的関係構築の機会が限られている。

川平では、30 年以上居住し地域行事へ熱心に協力するＩターン者を御嶽の氏子にすることが検討されており、実現すれば先住者の価値観を尊重し、地域に寄り添うＩターン者を先住者の価値体系の中に取り込む仕掛けとなり、社会的な関係を密にするＣタイプ集落へ移行する。

下地では、在来住民に指名されて公民館長を務めているＩターン者が新規のＩターン者と在来住民の交流の仲立ちとなることで、開拓集落としての地域の記憶を継承し、集落の個性を継承・確立しようと努力している。

②Ｂタイプ集落

宮良の先住者、公民館、移住者・Ｉターン者の関係を「Ｂタイプ集落」と呼ぶ。先住者、移住者・Ｉターン者が同一集落内で互いに住む場所が分離され地域での役割にも明確な違いが設けられており、公民館を中心とした自治活動において積極的な連携や協働が図られていない。

先住者が主体となった伝統文化の継承や地域性の維持に適しており、伝統文化の継承に特化することで先住者間の結束や地域への誇りの醸成に繋がる。先住者の人口が祭事継承可能な一定数以上であることが条件となる。

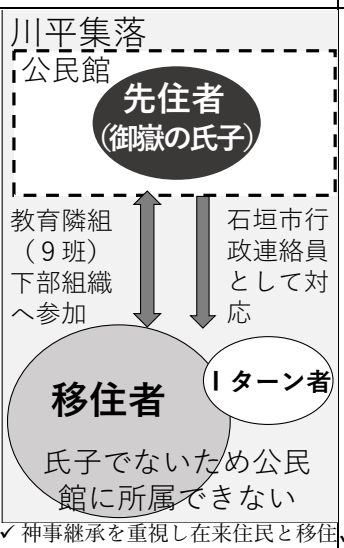
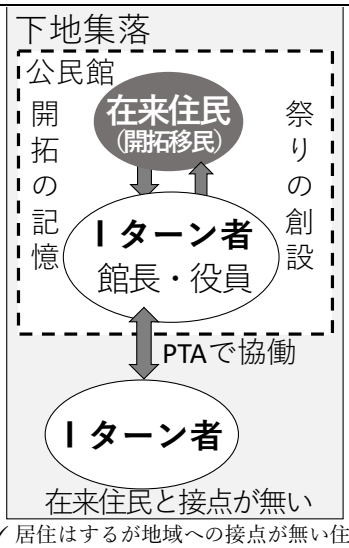
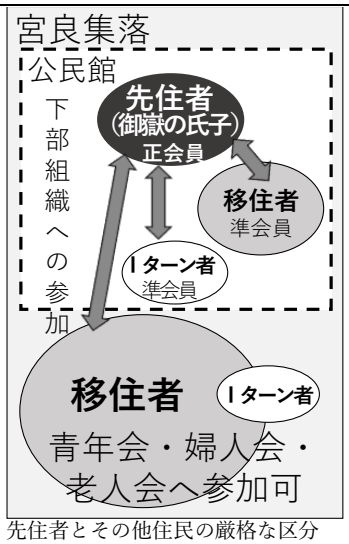
③Ｃタイプ集落

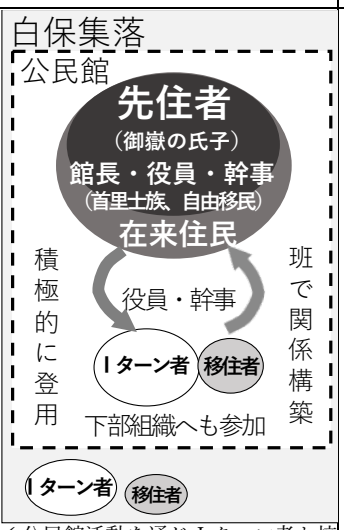
白保、久宇良の在来住民、公民館、移住者・Ｉターン者の関係を「Ｃタイプ集落」と呼ぶ。多様な住民の住宅が混在し、かつ在来住民が公民館活動において移住者・Ｉターン者の参加機会を積極的につくることで、集落運営の担い手として密接な協働が図られている。伝統や地域性を維持しつつ時代に合わせた新しい方法を取り入れるのに適した仕組み。在来住民が積極的に移住者・Ｉターン者を取り込み、移住者・Ｉターン者は地域に貢献することで信頼を得て、地域との一体化を深めている。神事や祭事の継承は、在来住民の人口が移住者・Ｉターン者よりも多い間は機能するが人口が逆転した場合、継承が困難になる可能性がある。

表 9　Ｉターン者との空間的、社会的関係からみた集落分類

		空間的関係（住宅の立地）	
		分離（疎）◀	▶（密）混在
社会的関係	扶助（密）▲	Ｄタイプ集落 在来住民、Ｉターン者の居住密度は疎であるが、密接な関係を持ち、相互に支えあいながら生活する集落	Ｃタイプ集落 在来住民、Ｉターン者が同一の区域に混在して居住し、かつ密接な関係を持ち、相互に支えあいながら生活する集落
	▼（粗）希薄	Ｂタイプ集落 在来住民、Ｉターン者の居住密度は疎であり、相互に関わりを持たずに生活する集落	Ａタイプ型集落 在来住民、Ｉターン者が同一の区域に混在して居住しているが、相互に関わりを持たずに生活する集落

表 10　公民館と移住者・Ｉターン者との関係からみた集落の特徴

分類	Ａタイプ集落		Ｂタイプ集落
該当集落	川平	下地	宮良
地域の担い手	先住者	在来住民+Ｉターン	先住者
人口規模	中（100～1,000）	中（100～1,000）	多（1,000 人以上）
人口割合	移住者　50%、Ｉターン者　20%	Ｉターン者　90%	移住者　70%、Ｉターン者　10%
Ｉターン者の公民館運営参加	公民館員にはなれない	ほとんどが公民館に入っていない	準会員としてのみ参加可能
公民館と先住者、在来住民、移住者、Ｉターン者の関係 凡例 円の大きさは相対的な人口規模を表している。			
	✓ 神事継承を重視し在来住民と移住者・Ｉターン者を明確に区分 ✓ 参加範囲を限定	✓ 居住はするが地域への接点が無い住民が多数存在 ✓ Ｉターン者同士の接点の創出が課題	✓ 先住者とその他住民の厳格な区分 ✓ 移住者・Ｉターン者へ配慮（準会員） ✓ 祭への参加不可

分類	Ｃタイプ集落		Ｄタイプ集落
該当集落	白保	久宇良	伊野田
地域の担い手	在来住民+Ｉターン	在来住民+Ｉターン	在来住民+Ｉターン
人口規模	多（1,000 人以上）	少（100 人未満）	中（100～1,000）
人口割合	移住者　7%、Ｉターン者　10%強	Ｉターン者　60%強	Ｉターン者　5%
Ｉターン者の公民館運営参加	役員、幹事などへの就任が可能	移住者が公民館長、役員を担っている	毎年移住者が役員に選任されている
公民館と先住者、在来住民、移住者、Ｉターン者の関係 凡例 円の大きさは相対的な人口規模を表している。			
	✓ 公民館活動を通じＩターン者と接点創出 ✓ 役職を与え地域への参画を促す	✓ 賃貸住宅の提供により地域への参加を促す ✓ 環境保全と運営貢献制度を創設	✓ ライフライン（水）を公民館に依存 ✓ 共同作業への公平な参加の仕組み

資料）2018 年、2019 年聞き取り調査より筆者作成

久宇良では、在来住民、Ｉターン者が互いに顔が見える関係の中で、交流を通して地域への誇りや愛着を継承している。Ｉターン者は開拓者への敬意と共感を持ち、集落環境を大きく改変させない方向に村づくりを誘導している。公民館による新たな制度（公民館認定制度[注 6)]）が創設され、Ｉターン者が地域で起業し、公民館がその

事業を認定することで、双方にとってメリットがある仕組みとなっている。

④Dタイプ集落

伊野田の在来住民、公民館、Ｉターン者の関係を「Dタイプ集落」と呼ぶ。在来住民、Ｉターン者が相互補完的に助け合いながら調和的に集住する状況を指す。集落の作り上げてきたインフラや制度の中に、それに賛同するＩターン者を受入れることで相互に補完しあう関係が成立している。在来住民は減少しているが、Ｉターン者も少なく、集落域が広いことから住宅がまばらに立地しており、交流や連携の機会が限られることから集落の結束の維持が課題となる。

4.2 地域コミュニティがＩターン者を受入れるプロセス

在来住民は、公民館活動や地域の祭り、イベントやPTA活動などへの参加の頻度や参加した際の協力の度合いで、Ｉターン者を評価している。

川平では、移住者・Ｉターン者の増加に対応して、集落居住者の誰もが公民館員になれる地縁団体の認定を検討した。しかし、祭祀を中心に集落運営を行うため、御嶽の氏子である先住者のみが会員となれる現在の仕組みを継続することとした。その一方で、長年川平に住み地域に協力的なＩターン者を御嶽の氏子にする検討が行われている。祭祀集団としての氏子が公民館員となる条件になっている。宮良では、過去に移住者が村への貢献を認められて公民館の役員になった例が確認された。下地では、移住後、地域のことに一生懸命汗を流して取り組んでいるＩターン者の姿をみた公民館長（在来住民）が公民館の役員になるよう声をかけ、公民館役員の責務を全うしたことが認められ、公民館長に抜擢されている。久宇良でも移住後３年間熱心に行事に参加していたことが認められ役員に指名され、入植記念式典を成功させたことで公民館長に任命されている。

これらに共通しているのは、公民館が共同体の中心的な位置を占める地域行事への参加と献身的な関わりが、先住者、在来住民に認められることで信頼を得て、公民館の中での役割を与えられる点である。その役割を全うすることで、さらに信頼が高まり、地域の担い手として認められる。地域コミュニティがＩターン者を受入れる際には、「貢献」、「信頼」、「期待」、「責任」のサイクルを通して、地域活動へ「参加」する立場から、ともに地域を運営する「協働」へ、さらには、新しい地域をつくりあげる「地域主体」として認められるというスパイラル状に高まっていくプロセスがみられる（図5）。

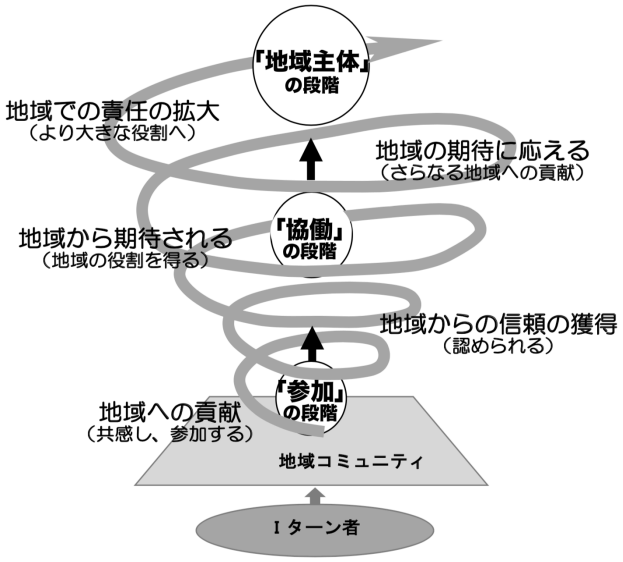


図5　地域コミュニティのＩターン者受入れのプロセス

4.3 Ｉターン者との関係構築の際の公民館の役割

石垣島の６集落は、その状況は様々ではあるが、いずれもＩターン者と地域コミュニティの関係が集落運営上の課題となっている。Ｉターン者と在来住民の軋轢を回避し、同一の集落空間の中で共存するための公民館の取り組みは３つに分類することができる（表11）。

もっとも基本的なものが「Ｉターン者の集落内での居場所や参加機会を作り出す（「参加」の段階）」で、白保や川平では、集落内を班に分け、班で祭の奉納や余興を担当するなど近隣住民が声を掛けやすい機会の創出がこれに該当する。次が、「Ｉターン者と先住者、在来住民が共同作業や相互扶助を通じて課題解決にあたる（「協働」の段階）」で、伊野田の集落美化や集落水道の管理への参加などがこれに当たる。もっとも密接な段階は、「伝統的な組織を開き、その中にＩターン者を取り込み新しい集落運営の仕組みを創造する（「地域主体」の段階）」で、

表11　Ｉターン者との関係構築の段階に応じた公民館の役割

	段階	仕掛けの具体例
粗 関係の度合い	「参加」段階	✓ 班（教育隣組）など居住区域単位での活動への参加（川平、白保） ✓ 公民館の準会員制度の創設（宮良） ✓ PTA活動、地域行事への参加（川平、白保）
	「協働」段階	✓ 扶役制度や簡易水道などの仕組み（伊野田） ✓ 協働機会としての新しい祭り創設（下地、白保） ✓ 入植記念日の継続とＩターン者の参加（伊野田、久宇良、下地）
	「地域主体」段階	✓ 長期定住で地域貢献のＩターン者を御嶽の氏子にする仕組み（川平） ✓ 公民館認定制度の創設（久宇良） ✓ 大規模開発などへの対応（川平、白保）

久宇良の公民館認定制度の創設や川平の 30 年以上のＩターン者を御嶽の氏子にする仕組みがこれに該当する。

５．まとめ

石垣島の６つの集落におけるＩターン者と地域コミュニティとの関係を公民館活動への参加資格に着目して分析した結果、以下の３つの知見が得られた。

①地域コミュニティとＩターン者との空間的、社会的な関係により集落は４つの特徴に分類できる

集落の形成過程や人口規模、先住者、在来住民とＩターン者の人口比率、地域の伝統文化の継承の状況などに違いはあるが、Ｉターン者との空間的（住宅分布）、社会的関係（公民館活動への参加）から石垣島の集落は 4 つのタイプに分類できる。

②地域コミュニティとＩターン者との関係は公民館活動への「貢献」「信頼」「期待」「責任」のサイクルで深まっていく

地域コミュニティは、Ｉターン者が地域の価値観に寄り添い地域に貢献する意思があるかを見極めており、その場として地域の自治組織である公民館の行事や役職が利用されている。地域活動への積極的な参加の姿勢が信頼を生み、地域の中で認められるきっかけとなる。地域はＩターン者に期待し、役割を与えることで、集落運営の主体として育成を図っている。地域の中での責任が生まれ、それを果たすことで、地域コミュニティとの関係がより密接なものとなっていく。

③集落運営は公民館を核に先住者、在来住民が担っており、移住・定住時には公民館との関係構築が求められる

石垣島では公民館が集落運営を担っており、Ｉターン者が地域コミュニティと良好な関係を構築し、定住していく上でも重要な役割を果たしている。集落の伝統や人口構成などにより、Ｉターン者への期待や地域参加の条件は異なり、移住・定住に際しては公民館の特性の把握や、公民館との調整を行う必要性が示唆された。

本研究では、石垣島の農村集落では、自治組織である公民館が集落運営の主体として、Ｉターン者の移住・定住にも深く関わっていることが明らかとなった。人口増加の堅調な石垣島も今後、先住者、在来住民の人口が減少する中で伝統文化や自然環境などの地域の特性、独自性を維持・継承するために、Ｉターン者などの外来者との関係構築が重要となる。開拓集落が在来住民の人口減少から地域への理解のあるＩターン者を積極的に公民館役員として取り込み集落を維持しているように、伝統的集落においても地域の特性に応じた移住・定住施策の検討と公民館活動を通した地域主体の育成が必要である。

注

注)1　御嶽とは、参考文献 17）によると「村の御嶽とは、いわば鎮守の森であり、村の守護神を祀る御嶽のことである。」とされ、村を構成している集団の信仰・儀礼上の聖地のことである。

注)2　西海岸の川平以北、東海岸の白保以北にも集落が拓かれたが、明和８年の大津波の被害やマラリアなどにより廃村となるなど、独立村として存続した集落は、川平、白保が最果てとされた

注)3　自由移民とは、敗戦により台湾などから引き上げてきた宮古諸島の人々が新天地を求めて、縁故者などを頼りに八重山に移住してきた人々を指す。戦後の移民には、この他に琉球政府による計画移民がある。

注)4　ニーロー神の儀礼とは、世持神、二ロー神、アカマタ・クルマタなどとも呼ばれる夏の収穫儀礼の来年の世願いに出現する祭祀である。宮良では、明和の大津波後に小浜島からもたらされた。この来訪神の儀礼は、祭祀集団である村人以外には、儀礼にかかわる一切のことを部外者にはもらさないため秘祭と言われている。参考文献 16）

注)5　白保では、公民館の前身として 1916 年（大正５年）に白保字会が設立され、1940 年（昭和 15 年）に白保区に変更、1946 年（昭和 21 年）に白保部落会となり、1953 年（昭和 28 年）に白保公民館に名称変更を行っている。

注)6　扶役制度とは、石垣島内では伊野田集落にのみ設けられている制度であり、世帯毎に集落の共同作業などへの参加ノルマを設け、ポイント化したもの。住民は年間にこなさなければならないポイントを年度当初に付与され、共同作業に参加する毎に、作業の対価に見合ったポイントが消費される。全ての公民館員が参加し、ポイント分の共同作業を行っている。

注)7　公民館認定制度とは、2018 年５月に久宇良自治公民館が創設した制度で、地域のキャパシティを超えた観光利用などを抑制するために、地域に貢献する事業者を明確にするために公民館が事業者を認定する制度。認定事業者は、認定料を公民館に支払い、公民館はそれを運営費用に充当することで、事業者が地域に貢献できる仕組みとなっている。

参考文献

1)　石垣市（2016）：石垣市移住・定住支援計画【平成 29 年～33 年度】、石垣市
2)　柴田健(2015)：移住者の受入れと地域継承の課題-移住ブームが続く沖縄・裏石垣からの報告-、都市住宅学 89 号、p18-23
3)　小田切徳美（2016）：「地域みがき」が人を呼ぶ-田園回帰の本質，岩波ブックレット No.950 田園回帰がひらく未来　農山村再生の最前線、p16-27.
4)　石垣市（2016）：移住・定住支援に関する意見交換会、2017 年６月 16 日入手資料
5)　上村真仁・山崎寿一（2018）：I、U ターン者の移住動機と地域との関わりに関する研究-石垣島白保集落での WWF サンゴ礁保護研究センター職員に着目して-、住宅系研究報告論文集 13、p125-134
6)　金城朝夫（1988）：ドキュメント八重山開拓移民、あ～まん企画、沖縄
7)　石垣市市史編集委員会　石垣市史　各論編　民俗　上　第１章第２節　地縁組織　p201-228
8)　川平村の歴史編纂委員会（1976）：「川平村の歴史」、川平公民館、熊本
9)　白保村史調査編集委員会（2009）:「白保村史」、川平村の歴史編纂委員会、沖縄
10) 琉球大学社会人類学研究会（1977）:「白保　八重山白保村村落調査報告」、根元書房、沖縄
11) 石垣博孝（2007）：第３節　村で祀られる神、石垣市市史編集委員会、石垣市史各論編　民俗下、p91-123
12) 仲松弥秀（1990）:「神と村」鳥社、東京
13) 八重山文化研究会(2011)：「石垣島白保以北の旧村々-牧野清生誕百年記念論集- 、沖縄
14) 小林文人（2002）：沖縄戦後史と社会教育実践-その独自性と活力-小林文人・島袋正敏編，沖縄の社会養育、エイデル研究所、p10-21.
15) 沖縄県公民館連絡協議会（2009）：第３分科会（地域づくりの拠点としての自治公民館のあり方）、第 39 回沖縄県公民館研究大会北部地区大会、p39-50
16) 石川雄一（2010）：5 章石垣島におけるＩターンの動向と中高年Ｉターン者の旧集落への移住、平岡昭利編著「離島研究Ⅳ」海青社、p81-97
17) 又吉祥一郎（2014）：８章石垣島川平における混住化と古集落の再編、平岡昭利、須山聡、宮内久光編著「離島研究Ｖ」海青社、p133-150
18) 吉田佳世（2010）：村落（シマ）的世界を再考する-八重山群島石垣島・伊原間集落における移住者と先住者の関係をめぐって-、人文学報 / 首都大学東京都市教養学部人文・社会系，東京都立大学人文学部 編、423 号、p71-102

謝辞

本研究にあたり、各集落の関係者の皆様、石垣市役所の皆様にお世話になりました。また、現地調査では、神戸大学工学部建築学科瀬戸口由佳氏、同大学院工学研究科田川美那海氏、羽柴優氏に協力をいただきました。本稿は、平成 31 年度筑紫女学園大学特別研究助成費による研究成果の一部である。ここに記して謝意を表します。